

## ブックエッセイ

### 危機対応から見える「最貧国」脱出戦略

高橋一生  
アレキサンドリア図書館顧問  
元国際基督教大学教授

岡野英之、2022、『西アフリカ・エボラ危機 2013-2016』、ナカニシヤ出版

2020年1月から始まり3月にはパンデミックになったCOVID-19は、我々を家に閉じ込めることによって、社会の巨大な破壊をもたらすと同時に多くの貴重なものを生み出しもした。生産の典型的なものが、この時期は優れた書物が書かれてもきた、ということであろう。文化人類学者の岡野英之の著書はその一例である。

シエラレオーネ、ギニア、リベリア（すべて最貧国）に焦点を当て、エボラ出血熱に襲われ、それを克服してきた状況を克明に記録し、さらにシエラレオーネに関しては深掘りをしている。その作業から、おそらく著者の意図とは別に（著者の視点はあくまで分析・記録）、シエラレオーネが「最貧国」から脱出するための戦略もほのかに見えてくる。世界政治から、庶民の軒下での日常の生活をエボラ出血熱が結びつける状況を、17頁に及ぶ膨大な文献リストと10年に渡る現地調査を踏まえて描き切る好著である。

著者の文化人類学者としての分析手法は主として参与観察である。観察者は観察対象と平等の視点を維持することに努力し、上から視線を徹底して避ける。例えば著者がなじみにしている研究協力者の住まい（一間に夫婦と子供一人の3人暮らし）の軒先に陣取り、周りの人たちの生活を観察したり、話し合ったり（シエラレオーネは旧英国植民地でかなり英語が通じる、また英語と現地語のミックスで出来てきたクリオ語も著者は少しは理解できる様子）する。それと同時にジャーナリスト手法も駆使し、できるだけ多くの人たちにインタビュー（その中にはSRIDメンバーで現在はカイロで活躍中の池田明子さんも含まれ、著書に何度か出て来る）を行い、生きたマクロとミクロの接点を確保している。

エボラ出血熱は1976年6月に現在の南スーダンで初めて特定され、2013年12月に西アフリカで発生するまでに21回にわたり中央アフリカで発生した。最近ではコンゴ共和国で2018年—2020年にかけて発生した。著者が対象とする西アフリカで2013年末から2016年6月にかけて発生したものはその中でも桁外れの規模になった。28,652名の感染者（実態はもっと多いであろうとのこと）と、15,261名の死亡が記録されている。症状がマラリアに似ているので、ともすると早期発見が難しいらしい。ウイルス性感染症で治療が遅れると致死率は80-90パーセントに上るそう。感染期の2年半のうち激烈を極めたのはリベリアでは2014年7月—2014年12月、シエラレオーネでは2014年9月—2015年1月であり、ギニアの感染者は限定的であった。

国際社会からの対応は国連事務総長、国連安全保障理事会、WHO、国境なき医師団、米国 CDC、国際赤十字・赤新月運動、パスツール研究所などを中心とし、その他多くの二国間援助機関、NGOs などもかかわった。特筆すべきは国連機関に関しては事務総長が介入し、安全保障理事会が 2014 年 9 月に「国際の平和と安全に対する脅威」と認定し、「国連エボラ対策緊急ミッション」が組まれたことである。これは著者も指摘するように、1990 年代を通じて国連が活性化され、と同時に国際社会の安定を揺るがす要素が多様化することを受けて、幅広く「安全保障化」が進んでいたからであろう。この安保理決議があったからリベリアの平和構築ミッションで働いていた池田さんのオフィスもエボラ対策に動員されたのであろう。

国内（著者はシエラレオーネの専門家なので、記録もこの国に関して深堀りがされている）では、初期にはエボラ発生を信じない人たちが多かったとのことである。啓発に多くのエネルギーを割かれた様子が描かれている。識字率が低く、テレビも新聞もほとんどない状況で、海外からの資金を使って地元有力者が中心になって協力者を募っていく様子はなかなか興味深い。

医療体制は援助の多元化の結果分断され、なかなか一体として機能しない。政府機関も杓子定規な対応で、有効には機能しない。その間、葬式や病院を中心として感染者が激増する。その悪化する状況を、社会的営みが小さく従って密な人間関係が増幅する。深刻化する一方の感染状態に変化が出てきたのはシエラレオーネ独特の社会状況が機能し始めてきてからである。それは多くの途上国で観られるパトロンクライアント関係のシエラレオーネ版が機能し出してからである。行政システムとしては宗主国英国が、フリータウンの外側に 19 世紀以来諸小王国を統合する過程でその諸小王国をチーフダム (chiefdoms) とし、1961 年の独立後もそれを一つの行政単位として使っている。その長はかつての royal family になる場合が多いそうだ。彼ら支配階級はおよそ 500 家族あるとのこと。その長は終身身分。その下の区分の Section、Town、Village の長も事実上この支配階級の人が長期にわたって務める場合が多いとのことである。国、地方の議会議員の中にも名士がいる。それらの人たちがいわゆるパトロンとなり、国際機関、NGO、パイの援助機関などから資金などの「玉」を受け取り、それ（の一部）を配分して人々を動員すると、世の中が動き始めた。

また、「援助ビジネス」の一環として生まれる CSO (Civil Society Organization) も青年団、女性団体、自治会、農民組合、労働組合などの横の関係を基本とした組織として人々を動員するのに役立ったようである。その両者を合わせると縦と横の軸が社会にダイナミズムを生み出す。さらに、2014 年 9 月からは中央政府でのエボラ管轄は医療・保健省から軍に移った。これらが総合的に機能し出して、シエラレオーネで猛威を振るったエボラ出血熱が 5 か月弱で終息に向かうことになった。著者は「ローカルな現場には、グローバルなレベルからローカルなレベルまで“地続き”なものとして立ちあらわれる」(p.ix) と述べている。

筆者は著者の記述からシエラレオーネが「最貧国」から脱出する構造が、上記の記述から見えてくるように思える。この国はダイヤモンドなど（これが原因になって内戦になり、青年を中心とした反乱軍がこの国を長期にわたり引き裂くことになった状況を著者は ICU の私の学生として研究していた）の鉱産物を始め未開発資源が豊富であり、社会が安定し、政治・行政が機能すれば外資にとって魅力のある市場であり得る。そのためには、chiefdom を中心とした地方行政システムの主体性を強化することをガバナンス課題の中心に据えることが、先進国のパターンとは異なるが、シエラレオーネにとってはいいのであろう。CSO と地方自治体の連携を強化する。中央政府の中心機能を外交、内外 security 及び教育などに置く。と同時に、中央政府は地方自治体の代表とともに、この小さい国（人口 700 万強）がさらに地方分権化された状況を踏まえたきめの細かい開発政策を策定する。この姿が見えだすと海外からの投資も増加し出すのではなかろうか。実際 1990 年代以来途上国における地方自治体の強化は国際開発における一つの重要な課題になってきている。

なお著者は若いころ国連を含む援助機関で働くことを目指したが、いざオファーを受けると、援助の「上から目線」は自分には合わない、と感じ、途上国の現実を報告するのが自分の役割だと判断した、とこの著書の最初のほうで述べている。そのために文化人類学者としての道を歩んでいる。その著者が、この著書の最後に次のように述べている。「この 10 年間で新ためて感じたのは、その国の事情もよくわからずに手探りのまま、その国のために働いている国際援助機関の方々が尊敬の対象であることだ。私が、無理だとあきらめた仕事をコツコツとこなすことで、それが現地の人々の生活を少しずつ良くしている。特にエボラ危機後の調査で、そうした思いを強くした。」(p.253) 著者のこの本を通じての「報告」もまた途上国の人たちの現状の改善のヒントをたっぷり和我々に与えてくれている。現在著者はミャンマーに関する調査に多くの時間を使っている。シエラレオーネの内戦が研究の原点である著者に相応しい取り組みであろう。ぜひ、ミャンマーとシエラレオーネの両方に対する分析を複眼思考で深め、途上国世界に対する我々の理解を助ける仕事にさらに頑張ってもらいたい。国際政治、国際行政から村人の日常生活までを描き出すユニークな学風を打ち立てつつある。かつての学生（筆者の助手をも務めていた）が優れた学者に育ちつつある状況ほどうれしいことはない。